

メイドから母になりました

登場人物 紹介

レオナルド

ジルの養父。
王宮魔法使いの筆頭。
悪気なく周囲を
振り回すことが多い。



リリー

異世界に転生した元女子高生。
現在はメイドとなり活躍中。
レオナルドの依頼によって、
ジルの母親役として奮闘する。

ジル

生まれつき魔力が高く、
レオナルドに引き取られた
6歳の少女。健気で賢い。

シド

レオナルドと契約している精霊。
面倒見がよく、
リリーとジルをかわいがる。



アムド

レオナルドと契約している精霊。
非常にマイペースで
口数が少ない。



セドリック

レオナルドの同僚。
相棒のウイレムを
諷めることが多い。



ミリス

レオナルドと契約している精霊。
アムドに想いを寄せているが
素直になれない。



ウイレム

レオナルドの同僚。
力のある魔法使いで、
やや向こう見ずな
ところも。



エルネスト

リリーの兄。
妹のことを快く思って
いないようだ……？



一 「王家のメイド」魔法使い宅へ派遣される

唐突だが、私リリー・ルージュには前世の記憶がある。

前世の私は、日本の女子高生。母を幼い頃に亡くしたため、仕事で忙しい父にかわって家事をこなし、中学生の妹と小学生の弟の面倒を見ていた。おかげで、こんなに所帯くさい学生、滅多にいないよねってくらい、主婦じみていたと思う。貧乏で、住んでいたのは小さな古いアパート。私は特待生で学費が免除だったので、なんとかやりくり出来ていた。そんな中、家族四人仲むつまじく暮らしていたけれど、私は事故に遭^あって死亡し、転生したのだ。

思い出すときびしいけど、死んでしまったことについてはちゃんと納得してる。

今、私が生きているこの世界は、日本とは全く違う異世界。人々の髪色は金や赤が一般的だし、電気や水道、ガスはない。通貨は金貨や銀貨で、王政国家。中世ヨーロッパとか、某有名RPGを想像してくればいいよ。青いスライムで有名なアレとか。

RPGといえはお約束だけど、この世界にも魔法がある。でも実際に使える人は半分くらい。魔法使いとして仕事出来るほどの実力者は、そのうちの一刻くらいかな。

そもそも魔法とは、自分の中に存在する魔力を放出して行使するものらしい。難しくてよくわか

らないけど。ただ、この世界の人々は、多かれ少なかれ必ず魔力を持っているんだって。

魔法は使えなくても魔力を放出出来れば、魔法を封じ込めた石——魔法を使って、ちよつとした攻撃魔法や補助魔法と同じ効果が得られる。

でもごく少数、その放出すら出来ないくらい微かな魔力しか持たない人達がいて、その人達は魔力ゼロ体質と呼ばれている。そして私も魔力ゼロ体質だった。

あ、火を起こすとか明かりをつけるとか、日常生活用の魔力なら、触ったり、特定の操作をしたりするだけで魔法が発動するから問題ないよ。その分、本当に小さな効果しかないんだけどさ。十八年前、異世界に転生した私は、魔力ゼロなこと以外は普通の女の子。どのくらい平凡かって、まず容姿が十人並み。母さんは金髪美人で兄さんも美形なんだけど、私は父さんと同じ濃いこげ茶の髪に、ほんの少し緑がかかった茶色の目をした地味な顔立ち。年頃の女子としては、もうちよつと華やかな美人に生まれたかった。

そんな私は十三歳の時、とある貴族のお嬢様の話し相手として奉公することになった。というのも、父がそのお屋敷の護衛をしていて、当主である旦那様に私のことをよく話していたそう。そうしたら、体が弱く閉じこもりがちなお嬢様の友人に、と年の近い私が選ばれたらしい。

それで、行ってみたらビックリ。

うん、なにに比べて、その屋敷の管理のずさんさ！ 掃除の仕方も食事内容も、体の弱いお嬢様の体調を悪化させるものでしかなかったんだよね。

だってカーテンや絨毯を何年も洗ってないって言うんだよ!? そりゃ埃が舞って咳が出るに決

まってるじゃん！ その上、お嬢様が咳き込んでるのになにもしないメイドの態度にちよつとプツツンして、奉公初日にして盛大にやらかしました。 天気がよかったのでお嬢様を庭へ避難させて、窓を全開にして空気の入替えをし、徹底的に掃除に励んだ。

ちなみにその日の昼食は血のソーセージ。確かに鉄分やミネラルは豊富だけど、生臭くて食べられたものじゃない。すぐに野菜スープなんかが中心のメニューに切り替えさせた。今思うと、あの時の私、よく見逃してもらえたよね。相当好き勝手やったのに。

あとで旦那様にどうして怒らないのか聞いたら、『娘のために率先して動いた君をなんで怒れる?』って微笑まれた。旦那様マジイケメン、禿げてたけど。

掃除を徹底して野菜中心の食生活を続けていたら、お嬢様の咳は治まり、体調も良くなった。そして私は、素晴らしいメイドだという評価をいただくことに。そもそもメイドじゃなかったんだけど。おまけに、そのお嬢様が今は王太子妃……

お嬢様が王太子妃になったことは、もちろん嬉しかった。でも『私がこうして王太子様と出会えて幸せになれたのは、ひとえにリリーが私を献身的に支えてくれたおかげです』なんて言ったものだから、私は王家に目をつけられちゃった。

現在、私は「王家のメイド」と呼ばれている。この名称は、私だけに与えられた特別な名称らしい。といつても、私が仕えているのは王家というより、王太子夫妻なんだけどもね。

王家のメイドは王太子夫妻の覚えめでたく、彼女が派遣された先ではすべての採め事が解決する、

とか言われてる。要は、王太子の命令であつちこつちの家に派遣される使いつ走りのメイドつてこと。まあ、お給料はどっさりだし、仕事は楽しいし、充実した人生だと思つてる。

両親も喜んでくれたしね。ただ、嫁の貰い手があるのか心配はしてるみたい。この世界で十八歳といつたら結婚適齢期なんだけど、前世の感覚が抜けないせいで実感がわかないのよ。

そんな私に新しい仕事の話がきたのは、ついさっきのこと。

昨日までとある家に派遣されていて、久しぶりに登城したとたん、王宮騎士団長の執務室に呼ばれた。呼び出した張本人からじきじきに告げられた仕事内容は、あまりにも酷かつた。

「なんで魔法の適性のない私が、魔法使いの家にメイドとして行かなくやいけないんですか！」

「ははは。リリー嬢ちゃんは相変わらずおつもしろいなー、俺に嘔みつく若い女の子なんてそうそういないぞ？」

目の前で豪快に笑う騎士団長のおつさんを殴つてやりたい。というか、面白いつてなにさ。こつちは怒つてるんだつてば！

私が怒っているのには理由がある。私のように魔力ゼロ体質の人は、あまりにも強い魔力の近くにすぎると、時に魔力当たりを起こす。吐き気と頭痛で倒れて、三日間は魘されることになるのだ。

魔法使いの屋敷で住み込みのメイドをやってというのが今回の仕事内容なだけだ。魔力当たりを起こしかねない環境に行けだなんて、本当に理不尽だよね！

それに、よりにもよつて主となる人が王宮に仕える魔法使いの一人、レオナルド・マリエル様だなんて……

レオナルド様は稀代の天才魔法使い、若き隠者、破壊と終焉の魔術師……などの異名を持つ、超優秀な魔法使いだ。

長い黒髪と金の瞳に、芸術品のような美貌を持つ。ただいつも無表情で、全身黒ずくめの異様な人。それに人と話すのはあまり好きじゃないみたい。

この世界では、黒髪がとても珍しい。魔力の高い人だけが持つ特徴で、恐怖の対象になっている。何故なら魔力が暴走すると、台風が吹き荒れたような、隕石が落下したような、それはもうとんでもない被害が出るからだ。特に子供の頃は暴走する可能性が高い。生まれた子供が黒髪だと、捨てたり閉じ込めたりする親もいるんだとか。酷い話だよ。

そんな黒髪を持ち主であるレオナルド様だけど、とんでもない美貌と王家の信頼という好条件が揃つてるから、むしろ、侍女達の間で旦那にしたい男ランキングの上位にあげられている。住み込みで働くことになったら、嫉妬されまくるのがありありと想像出来て嫌だ。

「だいたい、なんで騎士団長様が魔法使いのメイドを探してるのよ」

「いや、探してるのは俺じゃなくて、レオナルドと王太子殿下なだけさ。前、仕事でレオナルドと組んだことがあるんだよ。それを知つてる王太子殿下に、嬢ちゃんの説得と説明を任せられたつてわけだ」

「なんで私なの？」

「いや、実はよー……事情を聞いたら断れなくなるぞ？」

「どうせ、断ったってなんだかんだ言って了承させる気でしょ」

「ははは、まあな」

全く悪びれないおっさんに、またイラッとした。つい立ち上がって置いてあったクッションをぶん投げちゃったけど、私は悪くないと思う。

「あ」

ところが、おっさんが避けたせいでクッションはそのまま飛んでいき、いつの間にか室内にいた人——レオナル・マリエル様にぶつかってしまった。

「あ、の、すみません」

とまどいつつも頭を下げる私に、レオナル様がクッションを差し出してくる。

「……ん」

怒りもせずクッションを返してくださるなんて、いい方ですね、とても。

もう一度頭を下げたら……え、レオナル様、座るんですか？ おっさんの隣に。なにこれ面接？

「あ、っと……」

私が来訪の理由を訊ねようとすると、レオナル様が口を開いた。

「今、二人が話そうとしてたから」

「レオナル様のことを話そうとしていたので、ここにいらっしやっただということですか？」

「ん」

や、やりにくい。会話が難しいよ、この人。おっさんもビックリしてるし。というか、理由になってないよね。

仕方がないので席に着くと、おっさんが焦ったように話し出した。

「い、いや、あのな？ その、レオナルがちびっこを引き取ったんだよ。それでメイドを探してるんだ。リリー嬢ちゃんに頼む前に何人か当たったんだけど、色々あつてな」

うん、でもそれ私じゃなくて、子育ての経験が豊富な人の方が絶対いいよね。前世では、私も妹と弟を育ててたけどさ。弟なんて、おしめもミルクも私が面倒を見ましたよ？

「だからって、どうして私なのか、そこを聞きたいのよ」

「いや、まあ、そのな？」

埒が明かないおっさんはほっといて、レオナル様を見つめる。するとわずかにたじろいだあと、目つきが少しだけ優しくなった気がした。え、なんで？

「……その目」

「目？」

「裏表ないから。変なこと、しなさそう」

……なにを言われているのかわからないけど……うん、もうちょっと突っ込んで聞いてみよう。
「変なことってなんですか？」

「ほうほうこと」

そう言つて、レオナルド様は私の頬に手を伸ばす。……つて、こら。ちよつと、なにする気!? 慌てて身を引くと、レオナルド様は少し目を見開いて、それからもう一度目元を緩めた。

「うん、やつぱり君がいい」

「な、あ」

私は驚きで口をパクパクさせつつ、必死に考える。……まさか。そして思い当たった可能性をおおずと口にした。

「色仕かけしてくるんですか、他の方」

「色仕かけ? わからないけど、キスしようとしたり……」

「ああ、はい、わかりました」

色惚けするメイドが多い中、私はそんな心配ないってことね、うん。

「つまり、レオナルド様に妙な真似をしようとせず、子育てに集中するメイドがお望みだと」

「そう。母親になつてくれる?」

「……もしかして、今までもそう言つてました?」

「ん」

その言い方じゃあ、たいていの女性が誤解するよ。レオナルド様にも大いに問題があるよね。でも、わかつてないんだろうな。

「いいですか、その言い方では誤解されても仕方ありません」

「なんで?」

「レオナルド様が引き取つた子供でしたら、レオナルド様が父親代わりですよね」

「ん」

私の問いに、レオナルド様はこくりと頷く。

「で、その子の『母親になつて』なんて、まるつきりプロポーズですよ?」

「……ごめん」

「いや、謝つていただかなくていいです。レオナルド様が不器用なんだつてことはわかりましたから」

「……やつぱり、君がいい」

どこことなく嬉しそうなレオナルド様に、私は仕方がないなと苦笑した。

うん、これは確かに、私に話ができるわ。大変そうなもの。諦めに似た気持ちで、私はこの話を受けるところを決めた。この人に引き取られた子供も心配だしね。

それまで黙つてなりゆきを見ていたおっさんが、感心したように息を漏らす。

「すっぱーな、嬢ちゃん。こんなにすぐレオナルドと会話が成立するなんて」

「ちゃんと聞けば、なにを言いたいかくらいわかりますよ?」

「いやいや、今の見て、なんでこいつがリリー嬢ちゃんに頼みたいつて言い出したのか、よくわかつたわ」

「え? レオナルド様のご希望だったんですか?」

今まで挨拶くらいしかしたことがないのになんで? と首を傾げると、レオナルド様が私を見た。

「ん……駄目？ 嫌？」

ちよ、美形なんだから、無駄に上目遣いとかしないで！ 私、イケメンに免疫ないの！ やめて！

内心で絶叫しつつ、なんとか愛想笑いを浮かべた。

「いえ、その、あまり話したことないのに、どうしてかと」

「特別に見ないから。君だけ」

「私だけ？」

思わず問い返せば、どこか安心したようなまなざしが向けられる。

「変なことするのも、怖がるのも、君だけはなかった。君がいい」

「……ええと、つまり色仕かけしたり畏怖したりせず、レオナール様に接するメイドはいない？」

「ん。だから、安心出来る。それに、リリーは最高のメイドだって言われた」

「……どなたに？」

嫌な予感に顔を引き攣らせる私を気にもとめず、レオナール様が口を開く。

「王太子」

「やっぱりかあああ！」

予想通りの答えについ絶叫する。ええ、わかってますよ、最愛のお妃様がなにかというと私を頼るから、嫉妬全開なことくらい。隙あらば仕事を押しつけて、城から遠ざけてくたくたく仕方がないのも知ってるけど……

「私が止めなきや暴走しまくってお嬢様泣かせるくせに、なにいつちよまえに嫉妬してるのよ！

その前に女心を学んでこい！ あの色惚けええ！」

「お嬢、お嬢、不敬罪にされんぞ、声抑えとけ」

「だって！ 泣きながら『夜の営みが激しくて耐えられない』って縛られる身にもなってよ！」

「頼む！ 若い娘が人の色事について叫ばないでくれ！」

ソファから下りて半泣きで土下座し始めたおっさんを見て、ちよつと頭が冷えた。

でも、やっぱりあの王太子は一発殴りたい。

「いくら好きだからって、お嬢様に近づく男性の情報を全部集めてこいなんて、婚約前から私に命令するのよ。それでいて今度は私が邪魔だとか、もうやってられない」

王太子はお嬢様を見初めてすぐ、私に接近してあれこれ命令してきたのだ。

「お嬢が真顔で言うとは怖い」

「怒ってるもの。それ以外にも、本で調べて東の国の薬を作って命令もあつたし……私、メイドだよ？」

「……聞きたい」

ぼそりと呟かれた言葉に振り向くと、目を輝かせているレオナール様がいた。

「……え、なんで？」

「東の国の薬、知りたい。教えて」

「本で読んだ知識しかありませんよ？」

「読み解けるのが凄い。知りたい」

「私知ってる程度の知識でよろしいのでしたら……」

「ん」

どこことなく機嫌がよさそうなレオナルド様に首を傾げる。葉の知識なら、魔法使いのレオナルドの方がありそうなんだけどなあ。

そんな感じですっかり気に入られたらしい私は、さっそく今日からレオナルド様の家に派遣されることになりました。

レオナルド様の屋敷に住み込みで働くことが決まり、派遣にあたっての手続きなどを済ませたと。彼の自宅に連れてこられた私は、門前でポカンと口を開けた。

「わー……」

マヌケなことに、それしか言葉が出ない。門の向こうにあるのは、二階建ての広大な屋敷。煙突が四本もそびえ立っている。外壁は石造りで、あちこちに蔓が巻きつき、ずいぶん雰囲気がある。敷地の奥の方に、屋敷とは別の高い塔が見える上に、視線の先の玄関は両開きの大きなものだ。想像していたよりも凄く立派で、なんだか気後れしてしまう。貴族の邸宅に引けを取らないほど豪華だ。

「こっち」

「は、はい」

手招きされるままついていくと、大きな扉がでんと……あれ、鍵穴も取っ手もない？

とまどう私に、レオナルド様が扉を指差して告げる。

「手、つけて。こう」

「あ、はい」

言われるまま手のひらを扉についたら、ぽうつと淡い光が溢れて扉が開いた。……え、なにこれ。

「認識」

「認識？」

レオナルド様の咬きに、首を傾げて問い返す。

すると、彼は淡々と口を開いた。

「そう。扉が覚えた」

「……ええと、もしかして鍵穴と取っ手が無いのって、認識してる人じゃないと開かないからですか？」

訊ねると、彼はこくりと頷いた。

なるほど、さすが魔法使い。

感心してしみじみと自分の手を見つめていたら、レオナルド様が手を伸ばしてきて、私の手を両手で包み込む。え、なんで？

「変？」

「えっ、あの、特に体調悪くないですよ？」

「でも、手」

「ああ、生まれて初めて魔法を体験したので、ちょっと不思議で。だから見ていただけです」

勘違いされたみたいだ。気を遣ってくれたと喜ぶべきかな。それとも、女性にいきなり触れないよう忠告すべきか。うーん。

私がそんなことを考えていると、レオナルド様は手を離して歩き出した。

「行こう」

「はい」

レオナルド様のあとについて屋敷の中に入る。そのとたん、今まで感じたことのない異様な空気に気付いた。物音がするわけじゃないのに、どこか騒がしい気がする……これも魔法の影響なのかな？

「なんか、ざわざわしてるような……」

そう言ったら、レオナルド様は大きく頷いた。

「あの子がいるから、安定してない」

「あの子……ああ、私が面倒を見る予定の？」

「そう。魔力が高いせい」

どうやら、その子供は屋敷の空気に影響を及ぼすほど魔力が高いらしい。

レオナルド様はどンドン歩いて、地下への階段を下り始めた。ん？　なんかおかしくない？

「レオナルド様、どこに向かっているのですか？」

慌ててあとを追いつつ、私はレオナルド様の背中に疑問をぶつける。

「地下」

「それはわかりますが、あの、何故、地下に？」

「いるから」

あ、やだどうしよう。なんか凄く嫌な予感。

「ついた」

明かりがないせいで、小さな扉をゆっくり開けるレオナルド様の表情は見えない。だけど、部屋の中には光源があり、ちゃんと見えた。そこに広がる光景を見た私は――

「ちっちゃい子になにをやってるんですかああ！」

間髪いれずにレオナルド様の足を蹴り飛ばした。うん、きっと私は悪くない。室内の状況が最悪だったからだ。

床一面に描かれた、淡く光を放つ魔法陣。それはいいのよ、それは。

問題は、その真ん中に猿轡を噛まされてぐるぐる巻きに縛り上げられた子供がいるってこと。年は五歳程度だろう。簡素なローブを着ている。もじゃもじゃの髪と汚れた顔のせいで、性別はよくわからない。

「あれは、暴走を……」

蹴られた場所を擦りながら説明しようとするレオナルド様に、ぴしゃりと声をかける。

「わかってます。魔力が高いから、なにかしらの処置をしなきゃならないってことは。そのための魔法陣なのでしょう？」

そう言ったらレオナルド様は目を見開いた。
「どうして」

「魔力が高く、暴走するかもしれない子供。床一面に広がる魔法陣。このふたつが揃っていれば、推測するのは簡単です」

「そう、なの？」

「私は魔法使いではありませんから、この魔法陣の効果はわかりませんがね」
でもね、レオナルド様。問題はそこじゃないから。

「レオナルド様。猿轡を噛ませてぐるぐる巻きは駄目です」

「だって、逃げようとするから」

「もう少しましな方法をとりなさい！ 貴方はいくつですか！」

いい大人なんだから、不器用って言っても限度はあるでしょうに、まったく。

ふと気付いて子供を見たら、私達のやり取りに驚いたらしく、目を丸くしてこちらを見つめていた。

「で、これは私が入っても大丈夫な魔法陣ですか？」

ジト目で訊ねると、レオナルド様は自分を指差しながら頷く。

「大丈夫。帰ってきたから」

「レオナルド様がこの家にいる時は、魔法陣の影響はないんですね。では、あの子を自由にして
も？」

「ん」

もう一度頷いたのを見てから子供に近づく。

魔法陣を踏んでも、とりたてて妙なことは起こらなかった。相変わらず光ってるだけ。ただ、私
が近づくにつれて子供の顔に怯えが浮かぶ。

「ごめんね、怖かったでしょう」

そう声をかけて子供に手を伸ばす。小さな体がびくりと震えたけど、そのまま頭の上に手をのせて
ゆっくりと撫でた。すると徐々に緊張が緩んでいく。

この子はどれだけ怯えていたのだろう。まるで手負いの獣みたいな反応だ。

「私の言葉がわかる？」

訊ねると、子供は小さく頷いた。安心させるように微笑み、それから猿轡に手をかける。

「外すまで大人しくしてね。動く痛いかもしれないから」

もう一度小さく頷いたのを確認して猿轡を外し、続けて体と足首を拘束していた縄も解く。

「大丈夫？ どこか痛いところはある？」

私の問いに、子供は困惑したような表情で首を横に振る。堪らずそっと抱き締めたら、おずおず
と口を開いた。

「だあれ？」

「私はリリー、今日からこの家でメイドをすることになったの。貴方は？」

「……ジル」



「そう。ジル、どうしてここに連れてこられたかわかる？」

訊ねると、ジルは再びふるふる首を横に振った。それからレオナール様をちらりと見て、体を縮こませた。

本当に、なににも説明しないままここに放り込んだらしい。嫌な予感が当たったりすぎて、なんかもう……

「レオナール様、あとでお説教しますからね」

レオナール様の方を振り返って宣言すると、ぎくつと彼の肩が跳ねた。

「……ん」

ちよつと後悔しているみたいだけど、叱るところはきつちり叱らないとね。

……それにしても、こんだけ雇い主にズバズバ言うメイドで本当にいいんだろうか。いや、自分のスタンスを変えるつもりはないけどさ。

「とりあえず、この子を地下から出してあげましょう。もうここにいる必要はないですし。……ジル、お腹空いてる？」

訊ねると、ジルは小さく頷く。それと同時にぐーっと音が鳴った。真っ赤になってお腹を押さえる姿がいじらしい。美味しいものをたくさん食べさせてあげたい。

「ここから出たら、なにか食べようね。レオナール様、キッチンに食料品はありますか？」

「少し。あと、畑に野菜とか果物」

「果物……リンゴは？」

「ある。いる？」
「はい」

まずはリンゴでも食べさせて、様子を見ようかな。お腹が空いているところに一度に食べさせたら、胃に負担がかかるもんね。

そうして地下から出た私達は、そのままキッチンへ向かった。

キッチンに入り、調味料などを確認し始めた私に、レオナルド様が声をかける。

「リンゴ、採ってくる」

「お願いします」

本当は私が採りにいくべきだけど、場所がわからない。なにより、今はジルの傍を離れない方がよさそうだ。

レオナルド様を見送り、ケトルでお湯を沸かしていた時、くんと服が引っ張られた。顔を下に向けると、ジルが不安そうな目で私を見上げている。

「どうかした？」

「こわく、ない？」

怖いとは、なにに対してだろう。私はきよんととしてしまう。ジルは慌てたようにきよろきよろと周りを確認してから、ひそひそと言葉を続ける。

「ジルの、力。それから、あの人」

服を握る手にきゅつと力が籠もる。心細いんだなって、それだけでよくわかった。茶葉を入れた

ポットにお湯を注ぎながら、私は明るく笑ってみせた。

「ジルの力のことはよく知らない。高い魔力を持つ子だってことしか知らないの」

「そう、なの？」

「ええ。それに、レオナルド様も怖くないわね。口下手でなにが言いたいのかわかりにくいけど、結構おひとよしだし」

「おひとよし？」

「だって、今もジルのためにリンゴを採りにいつてるのよ？」

そう言うと、ジルのぼつちりした目が見開かれた。

そのあとにジルが訊ねたのは、どうして自分が縛られて地下室に閉じ込められたのかということだった。

「そうね、それはレオナルド様に直接聞かないとわからないわ」

子供も飲めるハーブティーをカップに注ぎ、砂糖を入れてジルに渡す。熱いから気を付けるように言ったら、ふうふうと吹いて冷まし始めた。

慎重にお茶を飲むジルを眺めながら、私はゆっくりと口を開く。

「私からひとつだけ言えるのは、レオナルド様はジルの嫌っていないってことね」

「……どうして？」

「だって、私にジルのお母さんになってほしいって言ったんだもの」

目を真ん丸に見開いたジルが口を開こうとしたのと、レオナルド様が戻ってきたのは、ほぼ同時

だった。

「お帰りなさい、レオナール様」

「……ん」

私が声をかけると、レオナール様は少し驚いたように私を見つめてから、すぐにリンゴを差し出してきた。

「ありがとうございます。お茶を淹れたんですが、飲みますか？」

「ん」

こくりと頷いたレオナール様にお茶を注いだカップを渡し、それからすぐにリンゴを切る。

小さな欠片を口にしたところ、ちよつとすっぱい。だけど幸い、キッチンには調味料も蜂蜜もある。

うん、リンゴの蜜がけにしよう。あれなら、多少リンゴがすっぱくても大丈夫だよ。

「ちよつと待っててねー」

そうと決まれば、さくさくと作ってしまいましょか。と言っても、小さく切ったリンゴに蜂蜜をかけるだけだし、あつという間に出来ちゃうだけだよ。

「はい、ジル。ちよつと食べてみて。ちゃんとしたご飯が出来るまで時間がかかるから、おやつ代わりになりそうなものを作ってみたよ」

リンゴの蜂蜜がけを載せた皿を差し出して説明すると、ジルは私の手元と顔を何度か見比べて、匙を口に運ぶ。

「どう？ 食べられそう？」

「あまーい……美味しい」

「ぱあつと表情を明るくさせたジルにホツとした。この分なら、普通に食べさせても大丈夫そうだね。」

「レオナール様も食べますか？ 甘いですけど」

「ん」

一応聞いてみたら、彼は結構乗り気で頷いた。すぐに作って差し出すと、躊躇なく口にする。しかもちよつと嬉しそう。甘いもの好きなのかな？

二人がリンゴを食べている間に、素早くキッチンを見回す。お茶と調味料については確認したけど、肝心の食材を見てなかったのだ。

「うーん、思ったよりありますね……レオナール様も料理をされるんですか？」

意外に野菜のストックが多い。私の問いに、レオナール様は頷いてみせた。

「たまに作る」

「そうですか、では食べられないものはありますか？」

「ない。大丈夫」

じゃあ、買い足さなきゃならないのはパンと卵と、生肉とかかな。

レオナール様はきつと家を空けることが多いんだろう。燻製や塩漬にした肉はあるけど、日持ちしないものは買っていないようだ。

あ、でも、まだ弱ってるジルを連れて買い物に行くわけにはいかないよね、どうしよう。さすがにレオナルド様にお使いさせるのはなあ……。ただ二人きりにするのも不安だし、などと考えてたら、レオナルド様が私の顔を覗き込んで首を傾げた。

「ん？」
「あ、いえ、買い物をどうしようかなど。ジルの傍を離れるのはよくないでしょうし、かといって連れてはいけませんから」
「……なら」

レオナルド様は、空中に向かっておもむろに手を伸ばした。すると、そこに光の渦が生じる。
「呼んだか、マスター」

光の中心部からヒラリと姿を現したのは、一匹の白い猫。

あまりのことに驚いてしまったけど、それは私だけじゃないらしく、リンゴを食べていたジルも目を見開いていた。

「ジル、おいで」

両手を差し出して呼ぶと、ジルはちよつと躊躇ったような素振りを見せてから抱きついてきた。

怖かったのか、しがみついてくる力は強く、半泣きになっている。だけど、ちゃんとお皿は机に置いてくるところが偉いなあ。

「……どうした？」

そんなジルの様子に、レオナルド様が首を傾げた。

「宙から急に猫が現れたので怖かったんでしょね。私も驚きました」

「そう、なのか」

「普通はビックリしますよ」

「……悪かった」

おや素直。しょんぼりと肩を落とすレオナルド様に気付いたジルが、オロオロしている。

「ね？ レオナルド様に悪気はないんだよ」

「……ジルにしたことも？」

「うん。ちゃんと理由があったからで、ジルを傷付けようとしたんじゃないみたい。それはレオナルド様にあとで話してもらおうね。ジルには知る権利があるんだから」

「うん、しりたい」

こくりと頷いたジルの頭を撫でつつ、やっぱりこの子、凄くしっかりしてるなって実感した。
泣きわめいてもおかしくないのに、なんでこんなに落ち着いてるんだろう。

その妙な大人しさが、痛ましくて仕方ない。それとも魔法を使える子は、みんなこんな感じなのかな？

ジルは、私の腕の中から身を乗り出して、さっきの猫を見つめた。

「ねこー」

「ああ、そうでした。レオナルド様、この白い猫はいったい？」

「ん。シド」

シドというのは、名前なのかな？ そう思つて見つめると、猫が応えるように尻尾を振る。
……考えてみれば、さつきマスターとかつて喋つてたし、きつとただの猫じゃないんだよね。

「ええと、シドさん？」

恐る恐る声をかけると、猫は私を見上げて口を開いた。

「なんだい、嬢ちゃん」

うわ、やっぱり人の言葉喋った！ レオナール様をマスターと呼ぶことは、使い魔なのかな？ ちなみに使い魔というのは、魔法使いと契約して、主従関係を結んだ魔獣や動物のことね。

「あ、あの、私はリリー。この子はジルです。今日からレオナール様のもとでお世話になりますので、よろしく願います」

「おう、よろしくな」

ニカッと男前に笑う。やだ、なにこの猫かっこいい！

「んで？ 面倒くさがりて人付き合いが大の苦手なマスターが、なんでまたちびっこ可愛いレディを家に招いたんだ？」

「ちびっこじゃない、ジル！」

「そう呼んでほしけりゃ、もつとでつかくんなな、ちびっこ」

ふう、と頬を膨らませたジルのあしらう姿もかっこいい。っていうか、可愛いレディとか照れる。……じゃなくて、うん。

「レオナール様、どうしてシドさんをお呼びに？」

レオナール様に訊ねると、シドさんもレオナール様を見上げて言葉を重ねる。

「おお、そうだった。用事はなんだ？」

それまで無言で私達を眺めていたレオナール様は、ゆっくりと私を示して……ん？ 私？

「お使い」

あ、なるほど、私とレオナール様の代わりに、シドさんが買い物に行ってくれると……え、猫だよね？ 喋ってるけど猫だよね？ とまどつてしまった私に、シドさんが問いかけてきた。

「どした？」

「えっと……」

「ああ、この姿だから頼みにくいのか。ちよつと待ってろ」

シドさんは、ポンって音を立てて姿を変えた。……うん、どちら様でしょう？

白猫のいた場所に立っているのは、さらさらの白銀の髪と、レオナール様と同じ金の瞳を持つ青年だった。整った顔立ちで、男性らしさと人懐こさを兼ね備えたイケメンだ。……凡人の私には、この部屋の中が眩しすぎるんだけど。なにこの美形率、おかしいつて。

「どしたよ、嬢ちゃん」

「いえ……ちよつと神様を呪いたい気分なので大丈夫です」

わかっているけどね、美形は美形で大変だった。でも平凡な外見の身としては、不公平だなんて感じちゃうんだよ……

そんなことを考えていたら、シドさんは大丈夫かーって頭を撫でてくれる。男前スキルが高すぎ

てキユン死にしそう。

あの、うん、私が悪かったので、そろそろ勘弁してください、本当に。

「だいじょうぶ？」

「うん、大丈夫。心配させてごめんね、ジル」

不安そうにこつちを見上げていたジルの頭を撫でると、ふにやりと柔らかく笑った。

やだもう、なにこの萌える子。こんなすぐに懐いてくれるなんて、どれだけ可愛いもの。

表情を緩めていると、シドさんに服の裾を引っ張られた。

「で、お使いの内容は？」

「あ、はい。卵や肉などをお願いしたいのですが……」

「んー、とりあえず三日分くらい買えばいいか？」

「はい。よろしくお願いいたします」

「んな硬い口調じゃなくていいっての。じゃ、マスター行ってくる」

シドさんは苦笑しながらひらひらと手を振り、買い物に出かけた。

うーん、使い魔さんってこんなに人間っぽいものだった。詳しくは知らないけど、使い魔さんは人の姿をとれなかったような。そもそも、人語は理解出来ても喋れなくて、契約者とだけテレパシーで意思疎通をすると聞いた気がする。

私が考え込んでいると、リングゴを食べ終えたレオナルド様が机に皿を置いて歩き出した。

「二人とも、こつち。案内する」

「あ、はい」

急いでレオナルド様についていく。まずは、私の部屋に案内された。場所はキッチンの上二階隣。

メイドの部屋なんて屋根裏とかが普通なのに。

室内には寝心地のよさそうなベッドとクローゼット、小さいけど机と椅子まで備え付けられている。ラックの上には水差しと洗面器もある。壁際には暖を取るための小さなストーブ。しかも薪じゃなくて魔石で暖める仕組みのものだ。いい値段がするよね、これ。

この部屋なら、家具などを買えば足りる必要はとらあえくない。こんなに待遇がよくていいの？ っ てくらしいの部屋だ。

「気に入った？」

「はい。これほど素敵な部屋、よろしいのですか？」

「ん」

満足そうに頷くレオナルド様に促されて、ひとまず部屋をあとにする。そのまま一階の他の部屋を確認したところ、キッチンの他に、風呂場とリビング、お手洗い、物置、応接間があった。キッチン二階には、レオナルド様とジルの部屋があるんだろうね。

うーん、今のジルを一人で寝かせても大丈夫かな……

「はい」

階段を上って二階へ行くと、レオナルド様がある部屋の前で足を止め、ジルを手招きする。おらずと近づいたジルの前で、ゆっくりと扉が開く。

「わあ」

「頑張った」

嬉しそうな声を上げたジルに、レオナルド様はどこなく誇らしそうだ。ひょいっと室内を覗き込むと、シンブルで可愛い空間があった。

淡い黄緑と白が基調の、爽やかな子供部屋。私の部屋と同じ家具が置かれてるけど、子供に合わせた作りで色も愛らしい。うん、はつきり言ってセンスがいい。

ジルも気に入ったらしく、目をキラキラさせている。レオナルド様も嬉しいみたいだ。いい感じだね。

そういえば、さつきレオナルド様が頑張ったって言ったけど、内装を考えたの、もしかしてレオナルド様なの？

「でも、服はまだ」

「あ、服は揃ってないんですか？」

「ん……大きき、わからなかった」

「そうですね、子供はすぐに大きくなりますし、あらかじめ用意しておくのは難しかったかもしれないですね」

私はジルを見る。だいぶ服が汚れてるし、着替えが必要だよ。でも外出着すらない状態だから、服を買いにも行けないし……ここは、私の腕の見せどころかな？

「レオナルド様、簡単な服や寝間着なら作れますよ」

「本当？」

「はい。ただ、布が必要なので……」

なにか使っているいい布はありますか。そう聞くより先に、目の前にドサツと大量の布が降ってきた……降ってきた？　なんでこんなことで、いちいち魔法を使うかなあ……

「え、あの、これ」

「使っている」

って、えええー、どこから出したのか知らないけど、この大量の布、どれもとんでもなく質がいいものだよ。

気が引けるものの、せっかくの厚意を無駄にするわけにはいかない。ひとまず選んだのは、柔らかくて手触りのいい、薄い青の布。これなら子供の肌を傷付けることはなさそうだ。

選んだ布を持って一階のリビングに移動する。そして私はジルを呼んだ。

「ジルー、ちょっとおいで」

「なあに？」

素直にやってきてちょこんと首を傾げるジルに微笑みつつ、手早く採寸する。今回作るのはゆったりしたシンブルな服だから、こんなもんで充分でしょう。

「どれくらいかかる？」

隣に座るレオナルド様に問いかけられたので、手を動かしながら答える。

「そうですね、とりあえず寝間着だけなら三十分もあれば」

「早い」

「単純な作りにするので」

被るタイプのノースリーブチュニックなんて、二枚の生地にえり首と袖口を作り、それを前後で縫い合わせるだけだもの。いつも持ち歩いている裁縫道具から裁ちばさみを取り出して、寸法に合わせて生地を切る。あとはちよいちよいと縫えば……ほら出来た。

「やっぱり、早い」

「簡単ですからね。ジルをお風呂に入れて着替えさせたいのですが」

「ん」

私の言葉に頷くレオナルド様の素直さに、なんだか困惑してしまう。

……さつきから思ってたんだけど、私の意見とか要望を聞いてもらうばかりで、大丈夫なの？
「あの、レオナルド様がさせたいことを申し付けてくださっていいんですよ？」

「ん」

レオナルド様はまたこくと頷いた。……いや、だからね、口下手なのはわかりましたが、言ってくれなきゃわかんないってば。

「全部、やってくれる」

「え？」

どうしたものか悩む私に、レオナルド様はぼつぼつ言葉を重ねた。

「頼みたいこと」

……謎かけみたいだな。つまり、私は既にレオナルド様がやってほしいことを全部やってるの？
え、どういうこと？

「可愛がって慈しんで、必要なものを与えること。充分やってる」

「ええと……」

さ、さすがに理解するのが難しい。

でもレオナルド様は満足そうだし、これ以上聞きづらいや。うーん、本当にいいのかなあ。

「お風呂、こっち」

「あ、はい……」

そんなことを考えてる間に、レオナルド様は部屋を出ていった。慌ててジルと一緒に追いかけると、風呂場に到着してすぐ、ポンとなにかを渡された。

「タオル」

「あ、ありがとうございます……」

至れり尽くせりすぎて、いたたまれない。しかもこのタオル、どう見ても新品だ。

「わからないことあったら、シドに。家事、任せてる」

「シドさん？」

シドさん凄いな、家事全般が出来ちゃうのか。あ、レオナルド様も料理は出来るんだっけ？
私が感心していると、レオナルド様は浴槽に歩み寄って手をかざす。

「レオナルド様？」

「お湯」

浴槽に水が溜まった次の瞬間、水はこぼこぼと音を立てて沸き、お湯に変わった。あの、うん。魔法は反則じゃない？ 薪とかを燃やして一生懸命お湯を沸かしてる一般人の苦勞って……いや、おかげですぐにジルを洗えるんだし、感謝しよう。

「ありがとうございます、レオナルド様」

「ん」

どこことなく満足そうなレオナルド様が、ちよつと可愛く思えちゃった。雇い主相手に不謹慎だね、反省。

隅々まで綺麗に洗い、髪を整えると、ジルはもの凄く可愛い女の子に変身した。

背中までの長さの、少し癖のあるストロベリーブロンドの髪。ぱつちりと大きな青い目。痩せていて子供特有の柔らかさには欠けるけど、将来が楽しみな美少女だ。

ちなみに、ジルが女の子だとわかったのはローブを脱がせた時。男の子だったら、ズボンも縫わなきゃって思ってたんだけどね。

「ああほら、まだ髪が濡れてるから」

体を拭いてすぐ、裸のまま駆け出そうとするジルを呼び止める。

「はい」

私にはすっかり慣れたらしく、笑顔を見せてくれるのが嬉しい。よく髪を拭いてから、作ったば

かりの寝間着に着替えさせる。

「着心地は大丈夫？」

「うん！」

にこにこ顔のジルを抱っこしてリビングに戻ると、読書中のレオナルド様と、シドさんの姿があった。

「戻りました。お帰りなさい、シドさん。あの」

「おう、たがいま。今日は二人とも疲れてるだろうから、晩ご飯は俺が作ってやるよ」

「ええと……」

つい視線が、シドさんの着けているエプロンにいつてしまう。ず、ずいぶんと可愛らしいピンク色……駄目だ、笑いそう。胸元の猫の刺繍がファンシーすぎて、もう耐えられない。

「あ、あの、メイドなので私が作ります。お使いさせてしまって、本当に申し訳ありませんでした」

そうそう、忘れちゃいけない。エプロンのインパクトが強すぎてスルーしかけたけど、家事は私の役目。

「おー、いい心がけだな。よし、俺様が特別に作るのを手伝ってやろう」

シドさんがニカッと笑って申し出てくれたけど、彼には料理以外で頼みたいことがあるんだよね。

「では、ジルの髪を乾かしつつ相手をしていただいてもいいですか？」

「え」

「生乾きだと風邪を引くかもしれないし、私が包丁を使ってる時にジルが傍に来たら危ないですから」

シドさんをお願いをしている途中で、ジルのはしゃぐ声が聞こえた。振り返ると、レオナルド様の膝の上に乗ったジルの髪が、ふわふわと宙に広がっている。

「あったかい！」

「おいおい、ずいぶんと優しいなマスター。温風で髪を包むなんて」
「早く乾く」

呆れたようなシドさんの声に、レオナルド様がぼつりと答える。微笑ましい光景なもの、前世のことを思い出さずにはいられない。

うん、温風で髪を乾かすって、ドライヤー？ 思わず呆気にとられたけど、さつさと料理をしてしまおう。そう決めて、私はキッチンに移動した。

といっても、今日作る予定のメニューは本当に簡単なんだよね。たっぷり野菜が取れてお腹も満足、なおかつ胃に優しい料理——ポトフを作るのだ。

日本ならおかゆやうどん、雑炊とかがあるけど、この世界には米もうどんもない。なにより醤油も味噌もないのよねー。もう慣れたし、いいけど。

シドさんが鶏を丸々一羽買ってきてくれたから、モモ肉を使って作ろう。まずは適当な大きさにして、臭みをとるため塩を揉み込んで置いておく。

その間にニンジンと玉ねぎを大きめに切って……他にはなにを作ろうかな。

「つて、嬢ちゃん仕事早いな！」

「そうですね？」

いつの間にか、シドさんが隣で作業を眺めていた。

シドさんの買ってきた中に牛肉が少しあったので、思い切って全部ミンチにする。それから玉ねぎをみじん切りにして、皮を剥き小さく切ったジャガイモを茹で始めた。

「シドさん、苦手な食べ物ありますか？」

「あー、そもそも食事の必要はないが、食べるとなればなんでも食べる。好みとしては甘いものが好きだ」

あれっ、使い魔さんって食事の必要がないものなのかな？ 動物だし、食べると思ったのに。……まあ、いいか。

ミンチにした牛肉とみじん切りにした玉ねぎを、塩コショウでよく炒める間に、ジャガイモはフォークがすつと通るくらいになった。ザルにかけてポウルに移し、バターと塩コショウ、少しの牛乳と一緒によく漬す。大きなグラタン皿の一番下にさつき炒めたものを敷き、その上にマッシュポテトをみっちり詰めたら、仕上げまでほつとこう。

そうこうしているうちに鳥肉から水分が出てきたので、洗い流して、別の鍋で弱火で煮込み始める。灰汁が出たらすくい、それからニンジンと玉ねぎを入れた。その後、灰汁を取りつつひたすら煮込めばポトフの出来上がり。

煮込んでいる間にも、もうひと仕事。さつきのマッシュポテトの上に削ったチーズを満遍なく振

りかける。これをオーブンに入れて、こんがり焼き色をつけたなんちゃってシェパードパイを作るつもりだ。あとはパンを出せば充分だよな？

「……本当に手際がいいな。それに美味そうだ」

パイの下ごしらえを終え、ふうと一息ついたところで、シドさんがしみじみと言った。
「そうですか？ 慣れてるからでしょうか」

実際、前世でも今でも、料理する機会は多かった。この世界の母さんが小さい料理屋を営んでいるおかげで、七歳くらいからお手伝いでキッチンに立ってたもの。

さて、そろそろパイをオーブンに入れてしまおう。

ああ、チーズの焼ける匂いとか、ポトフがくつくつ煮えてる音とか。料理中って本当に落ち着くなあ……そして、さりげなく洗い物をしてくださっているシドさん、ありがとうございます。やらせてしまつて、すみません。

「よし、出来上がり！」

「おー、うまそう！」

「シドさんの分も作ったので、よければ食べてくださいね」

お皿に盛りつけたものから、シドさんが次々運んでくれる。なんだか申し訳ない気持ちになるんだけど、いいのかな。雇い主の使い魔さんを私が使っちゃつて。

「飯だぞー」

「ん」

「ご飯ー」

ああでも、リビングから聞こえるシドさんの声が楽しそうだし、いいか。もし駄目だったらレオナール様が教えてくれるだろう。

そうして最後に私の分も持つていくと、先程まではなかった子供用の椅子いすに、ジルが座っていた。

「どうしたんですか、この椅子」

私が驚いて訊ねると、レオナール様が少し得意気に答える。

「作った」

「あのね、ジルがご飯食べやすいようにつて作ってくれたの」

なるほど、ジルがキッチンに來なかつたのは、レオナール様に椅子を作ってもらっていたからか。ジルは、先ほどと比べてずいぶん安心している様子だ。レオナール様もジルが喜ぶのを見て嬉しそうだし、二人の関係はだいぶよくなつたみたいだね。

まあ、レオナール様にはあとできつちりお説教をするけど。ジルをぐるぐる巻きにして監禁かんきんしていた件は、うやむやにはしない。

「冷めないうちに食べようぜー」

「ん」

シドさんの言葉のあと、全員で食卓を囲み、夕食を食べ始める。メイドが雇い主と同じ食卓に着くのはどうだろうって考えたけど、レオナール様は私にジルの母親代わりを望んでいる。

家族ならやつぱり、ご飯は一緒がいいよね。

「おいしー!」

ジルはご飯をばくばくと食べつつ、幸せそうな表情を浮かべた。レオナール様は無言なもの、それなりにいい勢いで食べている。

けっこうな量を作ったから残るかも、という予想に反して、みんな完食してくれた。作った甲斐があるよね。

そうして食器をすべて流しに片付けて、コーヒーではなく、いい香りのする紅茶を淹れる。個人的にはコーヒーが好きなんだけど、この国では高価な輸入品で、滅多に手に入らないんだよね。

眠れなくなると困るので、ジルには温めた牛乳に蜂蜜を少し垂らしたものを出す。

「あまーい」

ミルクを飲んだジルが嬉しそうに笑う。無邪気で子供らしいその笑顔に、私もつられて微笑んだ。

「お腹、いっぱいになった?」

「なったー」

「じゃあ、これから私はレオナール様にお説教するね。もし私が怖かったら、シドさんにくつついてればいいわ」

うん、繰り返し返すけど、うやむやになんてさせないよ? 今までお説教しなかったのは、ジルのことを優先させただけの話。それに、あんなことをした理由を本人から説明させて、ジルに謝ってもらわなきゃ。

というわけで――

「レオナール様、お説教の時間です」

「……ん」

レオナール様は飲んでいた紅茶のカップを置いて、きちんと聞く姿勢になってくれた。意外と素直だよ、この方。普通、メイドが雇い主を叱るってありえないんだけど。

まあ、自分でも反省しているのかな?

「まず初めに。私はジルがどういう生い立ちか、どういう経緯でレオナール様に引き取られたのかはわかりません」

「ん」

「だからこそ、今まで見たものだけで判断してお説教です。いいですか?」

「わかってる」

私のあえて決め付けるような物言いに、レオナール様は気を悪くするでもなく頷いた。だけど、私は勢いを緩めずに言葉を続ける。

「私には魔法の知識がありませんので、どんな理由でジルを魔法陣から逃げられないようにしたのか、わかりません。それが魔法使いとしては当たり前前の行為だったとしても、理解出来ません」

「……ん」

「だから、一人の子供に対してレオナール様がとった行動へのお説教です」

地下で見た、ジルの怯えていた様子。それを思い出しながら、びしりと指を突きつける。

「幼児監禁は、立派な犯罪です」

だって、あの状況はそうとしか言いようがないよね。

「いいですか、まず幼い子を薄暗い地下に一人ぼっちで閉じ込める時点で駄目です。もしジルがトラウマを持ってしまったらどうする気だったんですか」

「……ん」

「それに加えて、猿轡を噛ませてぐるぐる巻き？ 悪意以外、感じられませんか」

そう言うと、レオナルド様はしょんぼりと俯く。けど否定や言い訳は一切口にしなかった。

やっぱり、自分でも悪かったと思ってるんだね。うん、状況だけ抜き出してみると、完全に悪役だよ。

「しかも、どうしてもそれが必要なのかをジルに説明していない。なんでそんなに勝手な行動をしちゃったんですか」

「……ごめん」

「謝る相手は私ではないでしょう？」

そう言って促すと、レオナルド様はシドさんにびったりくっついていてジルへ顔を向けた。

「ごめん。その力、守りたかった」

力、と言われてジルの顔が強張る。

でも、私は口を出さないと見守っていた。ここから先は、私が首を突っ込んでいい話ではない。

すると、レオナルド様はそつとジルの頬に触れて――

「……辛かっただろう」

――ぼつりと言葉を零した。

なにを指して辛いと言っているのか、私にはわからない。けどジルには理解出来たようで、大きな目から涙の粒を落とした。

「……う、わあああん！」

手を伸ばして抱きついてきた小さな体を、レオナルド様はしっかりと抱き締める。

泣きじゃくるジルの背中を優しく撫でて、何度も大丈夫だからと囁いていた。ジルを見つめる目はとても穏やかなのに、表情は今にも泣き出しそうだ。

きっと、二人が抱えている思いは、私には共有出来ないものなのだろう。それをほんの少しだけ、さびしいと感じる。

せめて母親代わりとして、泣き終わったあとのことを考えなきゃ。あつたかいレモネードでも作って、私も抱き締めてあげよう。

そう思ってキッチンに向かい、作業していると、何故かシドさんが追いかけてきた。

「どうした？」

「あんなに泣き叫んでいたら、きつと喉が渇くだろうと思って」

「そうか」

私が絞ったレモン汁と蜂蜜を練っている様子をしばらく眺めていたシドさんは、ゆっくりと口を

聞く。

「……魔力をうまく制御出来ない子供は、暴走して周りの全てを破壊してしまう危険性がある。それを防ぐために、マスターは地下の魔法陣でちびっこの力を封じたんだ」

「まあ、状況を見た瞬間に想像はついてました」

「……でも、怒っていたらどう？」

「ええ」

練ったものを一匙お湯に溶かせば、レモネードの出来上がり。多分ジルが泣きやむ頃には適温になる。

手を止めずに受け答える私に、シドさんは不思議そうな顔をした。

「ちびっこが怖くないのか？ 暴走するかもしれないのに」

シドさんの言っている意味がわからず、私は首を傾げた。

「怖いって、どういうことですか？」

「ちびっこが暴走すれば、人の命なんて簡単に奪える。そのすぐ傍にいますよ」

「……そのなかが恐ろしいんでしょね」

お盆の上に四人分のレモネードを載せて持とうとしたら、脇からシドさんに奪われた。

「ありがとうございます」

「いや……」

「さっきの続きですが、相手が自らの意志で人を傷付けようとするなら怖いですよ？ でも、ジル

はそうじゃない。本当に怯えているのは、ジル本人でしょう。私が怯える必要ありませんよ」

私だって魔力の暴走による事故の悲惨さは知っている。強大な魔力を持つ子供を恐れるのも仕方がないことだろう。

だけど私は、前世で父子家庭の可哀な子供という色眼鏡で見られた経験があるから、せめて自分先入観を持たずにジルに接したいと思うんだ。

そうそう、前世の記憶があることは誰にも言うつもりがない。愛情いっぱい育ててくれたこの世界の両親や、たった一人の兄にも。

ちくりと痛む胸に手を当てる。手のひらに感じる鼓動は、確かに私がここで生きている証なのに、心はいつも簡単に前世へと向かってしまう。

『――、大好きだよ』

ふいに蘇る懐かしい声。私の名を愛おしげに呼ぶ、柔らかくて温かな声に、そっと目を閉じる。

私は、それに応えることは出来ない。その名前と呼ばれていた存在は、もういないのだ。今の私はリリーだから。

「嬢ちゃん……？」

不思議そうな顔をしているシドさんに、ちよつとだけ笑ってみせた。

「なんでもありませんよ。さ、レモネードが冷めてしまっ前に持って行きましょう」

「お、おう」

私が見るく促すと、シドさんはとまどいつつもお盆を持って歩き出した。

「あ」
リビングに戻ると、レオナルド様に抱き上げられすっかり泣きやんだジルが、私を見て小さく声を上げた。恥ずかしそうにしながらも安心したジルの様子に、私は微笑む。

「喉が渴いたでしょう？ レモネードを作ったから」

「あ、ありがとう……」

お礼を言いつつも、ジルはレモネードには手をつけないで、じっと私を見つめてくる。

「どうしたの？」

「あの、あのね、レオナルドお父さんに聞いたの……」

いつの間にか呼び方が変わっている。

私が驚きに目を見開くと、ジルはしばらく言いにくそうにもじもじしていたが、やがて意を決したように言葉を続けた。

「お、お母さんって呼んでもいい？」

ジルはぎゅうつと目を閉じて、顔を真っ赤にしている。ふと視線を向けると、レオナルド様はジルの下ろし、こくりと頷いた。

なら、私の答えは決まってる。

「もちろん、嬉しいわ」

「っ、お母さん！」

飛び付くように抱きついてきた小さな体を、ぎゅつと抱き締め返すと、ジルは幸せそうな笑い声を上げた。

うん、この小さくて愛しい存在が、こんなにも私を求めてくれるなら、やっぱり後悔なんてしないだろう。

二 お母さんになりました

ひとしきりジルを抱き締めて甘やかしたあと——。ジルが少し離れたソファでシドさんとお喋りしているのを横目で見ながら、私はちくちくと針仕事をしていた。

「おねむ？」

「んー」

目を擦り始めたジルに、私は針をしまいながら声をかける。もうだいふ夜が更けてきたもの、眠いよね。

「ジルのお部屋にここっか」

「やー」

あらあら、むずがりながら寄ってきたと思ったら抱きついてきた。眠いのもあいまって、ちょっと甘えんぼさんなのかな？